

平成 30 年度 第 3 回

第三者評価検証委員会会議記録

確 認 欄	教育長	教育次長	係 長	係

日 時	平成 30 年 11 月 5 日 (月) 10 時 30 分～17 時 00 分		作成者 事務局 総務教育係 小林義尚
場 所	信濃町役場 公室 信濃小中学校 理科室	配付資料	会議次第、学力向上にかかわる市町村教委と県教委の懇談資料、第 6 次信濃町長期振興計画住民意識調査報告書、平成 28 年・29 年度信濃町立信濃小中学校評価及び学校関係者評価、これまでの経過をまとめた資料、学校公開資料、教育課程編制プロジェクト資料、前回会議録
出 席 者	<ul style="list-style-type: none"> ・ 竹内教育長、小松教育委員 ・ 高木教頭、小山教諭、滝澤教諭、中村教諭、小池教諭、(学校意見交換参加者) ・ 齋藤委員長、近藤副委員長、加藤委員、藤倉委員 ・ 勝野副校長、松木教育次長、小林総務教育係長 		
欠 席 者	なし		
内 容	検討内容	検討結果	
協 議 事 項	<p>1. 開 会</p> <p>2. 挨 拶</p> <p>3. 協 議 (1) 新たな資料説明</p>	<p>事務局：松木教育次長</p> <p>竹内教育長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの協議の中で、義務教委育学校として仕組みと地域特性による学校運営の部分でいくつかの課題が見えてきている。さらにそれらを深く掘り下げながら、改善案の方向性が見えてくるとありがたい。 <p>齋藤委員長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 改善の方向はこの 2 回の会議で見えてきている。慣れることで解消される部分は、課題が見えにくくなる。この小さな課題にもしっかりと目を向けて改善する方法を見出したい。 <p>事務局：小林総務教育係長</p> <p>◆平成 30 年度学力向上にかかわる市町村教育委員会と県教育委員会の懇談資料の説明</p> <ol style="list-style-type: none"> ①信濃小中学校の正答数の分布に着目した経年の変化で母集団が少ないとはいえない年による分布のバラツキが大きい。 ②小学校 6 年生時と比較して 9 年生になると国語も算数も正答分布が、正答率が低い IV 区分が減少し、正答率が高い I 区分が増加していることから、9 年間で子どもを育てる一貫教育の成果が見られている。 ③個に応じた指導と地域の人材施設の活用が、小中共に全国平均と比較して 	

学校運営調査の結果高い。一方で学力向上に向けた取組・指導方法は小中共に低い結果となっている。

【委員】

⇒小6での学力調査の結果が低い理由はなぜなのか。5年生からの教科担任に取り組んでいるのであれば、教科毎のゴールの設定をどうするか考える必要がある。【委員】

⇒教科担任制が理由というよりも授業時間数が足りていないことが原因である。【副校長】

⇒教員の授業計画が低く、教育課程の吟味があいまいなままでは、学習に対して児童生徒の興味や関心が持てない。【委員】

⇒人事異動による教員免許の都合で教科担任の教科が年によって変わることがあっても最善を尽くせるよう9年間で育てる教科毎のゴール設定を小学校の先生と中学校の先生と一緒に作ったらどうか。(例えば音楽では、卒業までには楽譜が読めるようにするなど)【委員】

◆第6次信濃町長期振興計画住民意識調査報告書の資料説明

①子どもたちが生きていくために必要な力(確かな学力、健康・体力、豊かな人間性)を身につける教育が行われていると肯定的な回答が34.6%であった。また子ども年齢が高くなるにつれて肯定的な回答率が下がっている。

②子どもたちが生きていくために必要な力を身につける教育が、今後さらに進めるべきかについて71.2%が肯定的な回答をしており、全てのアンケート結果の中で最も高い結果となっている。

③15歳から18歳以下のアンケート結果で、就職・進学したい地域を「首都圏」「中京圏」「北陸」「県外」と回答した者のうち将来、信濃町に戻りたい意向が59.1%であった。

④ふるさと学習による自身の変化について、友達と話し合ったり、一緒に作業することで、自分の考えを広げることができるようになったと回答した割合が約60%だった。

⑤小中学生のうち信濃町を好き、どちらかというが好きと回答している割合が86.4%だった。

⇒ふるさと学習の効果として、ふるさとに誇りを持つ人材育成について一定の成果が出ているのではないか。【委員】

◆平成28・29年度信濃町立信濃小中学校学校評価及び学校関係者評価の結果の資料説明

①平成29年度から学校運営協議会で学校関係者評価を行うようになった。

②9年間を見通したカリキュラムの作成と実践について意見が出ている。

(2) これまでの協議内容の確認

事務局：小林総務教育係長

◆これまでの経過をまとめた資料により協議内容の確認

①第1回は学校概要説明と校内視察。第2回は学力調査、学校行事等、特別支援教育について説明後に主任級学校職員との意見交換。第3回は成果と

課題の整理と着任2年以内学校職員との意見交換を予定

- ②これまでに出了された信濃小中学校の良い点と課題点の整理
- ③課題解決の方法案としてこれまでに出了された意見を(1)カリキュラム作成、(2)冬日課の見直し、(3)教員研修と地域人材活用、(4)特別支援体制の改善に別けて整理

(3) 義務教育学校
(小中一貫校)
の良い面と信
濃小中学校の
課題を整理

学校：勝野副校長

◆学校プロジェクトの進捗状況と義務教育学校公開研究会について報告

①義務教育学校には、(1)小学校と中学校の壁、(2)開校時の職員と移動できた職員の壁の2つの壁がある。義務教育学校として教職員が一つにまとまることの難しさがある。代表的な例として児童生徒の呼び方を「さん」と呼ぶのか「くん」と呼んでも良いのではないかの意見の違いが教職員間にあって未だに意見がまとまらない。

⇒教職員間の対話をもっと増やし、壁を取り除いて新たな義務教育学校としての共通の価値観を作ることが大切ではないか。【委員】

②教育の質の向上のため、全職員で11のプロジェクトチームを立ち上げた。

③プロジェクトチームの立ち上げによって教職員間の同僚性を向上させるねらいもある。

④ふるさと学習について教員の共通認識が持てていない。7年間の実践の整理を行っている。

⑤教科毎の9年間のカリキュラムのまとめを10月に学校公開として行った。

⇒学校公開の資料として、カリキュラムをまとめるのに苦労があったと思うが、その分だけ教科毎の系統性が見え価値があったのではないか。【委員】

◆各委員からのこれまでの感想と意見

①学校の中で子どもを育てる学力以外の社会性や人間性、体力面についての議論がこれまであまりされていない。子どもたちが自立するための力として、いわゆるテストの点数だけで図れるものではない。

②学力は数字が出るので分かりやすいが、豊かな人間性をどう評価するのが見えにくくて難しい。学校の中で行われる学び合いの根底にある個々の力がどのくらいあるのか判断するための社会力検査のテストもある。またRTI（レスポンス トゥ インターフェイス）の考え方で、学習に困難さを抱える児童生徒の支援方法を検討してみてもどうか。

③先生方の教育観をまとめていくことができればもっと上手くいくのではないか。義務教育学校としての到達点を設定し教員間で共有する。例えば、教科から見たゴール、保護者から見たゴール、それ以外のゴールを学校としてマネジメントする必要がある。そのためには9年間で子どもを育てるための人事的な配慮も重要になるのではないか。

④住民アンケートによる意識調査の更なる分析が重要になってくる。将来信濃町に戻りたいとの回答が約60%あることは大変素晴らしい成果であると言える。

(4) 学校職員との
意見交換

参加者：高木教頭、小池教諭、小山教諭、中村教諭、滝澤教諭、
齋藤委員長、近藤副委員長、加藤委員、藤倉委員、松木教育次長、
小林総務教育係長

- ①職員の人数が多くてとまどった。また小学校と中学校の教職員の文化の違いがあつてとまどった。
- ②初等部にいると通常の小学校と大きな違いは感じない。
- ③9年間の長いスパンで子どもたちを見ていけるので、教職員としての振り返りもできる。
- ④小中一緒の行事では、中学生のすごさを小学生が身近に感じることができる。その反面、小学生は運動会の競技数が少なくなってしまうたり、中学生は音楽祭で合奏のみになってしまうデメリットもある。
- ⑤小学生から図工、体育などの専科の教科があるので専門的な指導が受けられる良さがある。その反面、授業を入れ換えたり、授業時間を柔軟に変更することができないので忙しい印象がある。
- ⑥5年生から50分授業になるので、2時間目の長い休み時間がないので、外遊びができない。また初等部と高等部の午後の時間をそろえるために、給食後に掃除を行っており、給食後の休み時間も少ない。このため遊びの中でリーダーが育ちにくい環境だと感じる。
- ⑦掃除の仕方を教職員が事細かに教えなくても、上級生の掃除をする姿をみて自然にできるようになっていく。具体的なロールモデルが日常生活の身近にいることで低学年の成長につながっている。
- ⑧子どもたちは、優しく素直な子が多いので生徒指導の事案がほとんどない。一方で入学式がないので中学生としての自覚が低い。また困ったときに自分で解決しようとする子どもが少ないように感じる。中一ギャップは解消されているが、高校に進学してから苦勞する生徒もいる。
- ⑨中学生は穏やかで素直であるが、逆に大人しすぎる。一方で小学生はしっかりしている印象がある。
- ⑩中学生が校則に対してルーズな印象を受ける。また保護者も生徒指導に対する理解が他校と比較して低いように感じる。
⇒一般的な中学校の生徒指導や校則では、小学生と一緒に中学生がいる環境なので、保護者を含め難しいのではないか。【事務局】
- ⑪チャイムがないので生活指導が難しい
- ⑫音楽集会を月1回全学年一緒にやっているが、体育館に集合させるにも時間がかかって大変。音楽集会を月1回全校で行う意味があるのか疑問
⇒音楽集会の教育的な意味を先生方でもう一度しっかり話し合ったらどうか。小中の交流を目的に行っているのであれば、登下校時のバスの中など日常的な部分で十分、交流ができているはずではないか。【委員】
- ⑬中学生は、お昼の放送の内容を小学生が楽しめるよう意識しながら考えており、多様性を自然に考えられ幅広い発想ができる環境にある。
- ⑭教職員も子どもたちも小学校と中学校の交流を意識しすぎる風潮があり、

	<p>(4) 今後の進め方について</p> <p>4. 閉会</p>	<p>交流することが目的で必要以上に交流する行事が多いように感じる。 ⇒学校行事の目的をどう意味付けて、小中学生の交流をするか考える必要がある。義務教育学校として多様な学び合いの中で信濃町に誇りを持つ子どもをどう育てるかそのための手段の一つとしての交流ではないか。【委員】</p> <p>⑮半数がスクールバス等を利用して登下校しているため、教育活動がスクールバスの時刻に左右されて、教職員のストレスが大きい。</p> <p>参加者：齋藤委員長、近藤副委員長、加藤委員、藤倉委員、勝野副校長、松木教育次長、小林総務教育係長</p> <p>①教職員間での対話をする時間と機会を増やす必要があるのではないか。 ②学校行事を行う意味付けがなされないまま、こなすことが目的となっている行事もあるのではないか。 ③義務教育学校であることを意識しすぎて、小学生と中学生の交流行事が増えすぎているのではないか。掃除の時間や登下校の時間など日常的に交流はされているので、教育的意味づけを教職員間で共有する必要がある。 ④9年間で子どもを育てる義務教育学校であることから、改善すべき点は改善しながらも継続性を保つ仕組みを考える必要がある。 ⑤長野県全体で夏休み日数の延長が考えられる中で、授業時間数の確保が大きな課題となっている。路線バスの運行時間の見直しを含めて冬日課を考えて行く必要がある。 ⑥特別支援教育に関する部分については、今回話合いが少なかった。加藤委員と事務局で相談しながら改善案の作成を進めることとする。 ⑦改題解決の方法は、事務局案の4つの項目をベースに、評価検証をまとめる。また提言はシンプルで無理なく改善につながるような内容でまとめる。</p> <p>事務局：松木教育次長</p>
<p>次回内容予定</p>	<p>・評価検証結果と提言の案について検討する</p>	
<p>次回会議日時</p>	<p>平成31年2月25日(月)午後1時30分～</p>	